

オーストラリアと日本の保育観の違いについて ——オーストラリアの National Quality Standard を基準として——

横井一之 吉見昌弘

はじめに

名古屋短期大学専攻科保育専攻の留学タイプの学生は、1年次にオーストラリアの専門学校において9ヵ月間留学し、所定のコースを履修することでオーストラリアの保育士資格（Certificate III in Children's Services）を取得し、帰国している。留学する学生のほとんどは短期大学において保育士資格及び幼稚園教諭2種免許状を取得し、さらなるステップアップとして、海外の保育を学ぶ意欲のある学生達である。

その経験の中から日本における幼稚園及び保育所で実習したことと、オーストラリアの保育施設での実習を通して経験し感じたことでは、保育観についてどのような違いがあるのだろうか。

小野克志等（2016）は、オーストラリアで2010年に作成された保育の質の水準を示す National Quality Standard（以下 NQS と略す）による保育評価の実際について言及している。その保育の評価基準である NQS に基づいて、学生の実習レベルでの比較ではあるが、オーストラリアと日本の保育を評価できないか。また、一般の保育者がこの評価基準に従って、オーストラリアの保育を評価できるのではないかという可能性もないだろうかと考えた。

そこで、本研究では、両国の保育実習を経験した学生に、オーストラリアと日本の保育について、オーストラリアの保育基準である NQS をもとにしてアンケート調査等を実施し、その比較、検討することで専攻科の学生がオーストラリアと日本の保育観をどのようにとらえているのか考察することを目的とする。

1. National Quality Standard (NQS) について

オーストラリア政府は、2014年に The Australian Children's Education Care Quality Authority (ACECQA) を設立した。この ACECQA は、

表1 NQS 評価項目数

国、州や北部準州に代わり、設置認可や保育の質の評価の過程について監督を行っている。その基本理念は、幼少期の子どもの幸福を保証することにより、その後の子どもの人生、また国全体として競争力を引き上げ、教育の重要性を明らかにしていくことである。

ACECQA が規定した評価基準 NQS は主要

番	評価基準項目	評価中 項目数	評 価 項目数
①	教育と実践	2	9
②	子どもの健康と安全	3	10
③	身体的環境	2	7
④	保育者の配置基準	2	4
⑤	子どもとの関係	2	6
⑥	家族・地域社会との連携	3	9
⑦	リーダーシップとマネジメント	3	13
	計	17	58

7領域で構成されていて、①教育と実践、②子どもの健康と安全、③身体的環境、④保育者の配置基準、⑤子どもとの関係、⑥家族・地域社会との連携、⑦リーダーシップとマネジメントである。この7領域は表1に示されたように、合わせて58の項目数に細分化されている。本研究では、これらの評価項目をもとにアンケート調査の項目を作成し、両国の保育観を分析していく。

2. NQS を用いたアンケート調査

(1) アンケート調査の概要と方法

調査日は、2016年5月6日の「保育研究法Ⅱ」の授業内で実施した。調査対象は、受講している名古屋短期大学専攻科保育専攻（留学タイプ）学生25名である。なお、アンケートの実施にあたり、調査のテーマと主旨を説明した後、今後の授業における資料としての活用と筆者の研究目的としてデータを使用することを伝えた上で、学生の了解を得て配布、回答、回収を行った。

(2) 調査項目について

本アンケート実施の前に、学生達が過去に実施した実習の状況についていくつか質問した。たとえば、オーストラリアについては実習施設が幼稚園かチャイルドケアセンター（保育施設）かどうか。そして、いつ、何日間実習を行ったか尋ねた。また、日本については、保育所実習をいつ、何週間行ったか尋ねることで、それぞれの実習をイメージしやすくした。

表2 National Quality Standard を用いた調査項目

1.2.1. 子どもの学習と発達、保育者の継続的な計画づくり、記録、評価に反映されている。
1.2.2. 保育者は、子どもの考えや遊び、計画的な指導を考慮した保育に込めている。
1.2.3. 保育者は、子どもの学習や発達にたえず研究的な視点をもち保育を展開している。
2.2.1. 健康的な食生活を促進し、適切な栄養面を重視した食べ物が提供されている。
2.2.2. 子どもが、身体的活動について計画的で自発的な経験をするように対応されている。
2.3.1. 子どもは、全ての活動時間に適切に監督されている。
2.3.2. 子どもをケガから守るために、全ての害や危険から適切に予防されている。
2.3.4. すべての保育者が、子どもたちの虐待やネグレクトに対して責任を果たしている。
3.2.1. 屋外屋内スペースは、子どもが質の高い保育経験を積めるように計画設計されている。
3.2.2. 設備等は、適切で効率的に活用し、保育に適するように提供されている。
4.1.1. 常に適切な教員の配置と資格基準を満たしている。
4.2.1. 職業上の規範により、保育実践と触れ合い、人間関係が保たれている。
4.2.2. 保育に関わる者すべてが、協力し、挑戦し、助け合い、お互いの学びの重要性を理解し、技術、実践力を高めよりよい保育者集団を築こうとしている。
4.2.3. 保育者同士が尊敬しあい、公平性、他者の強みや能力を認め協働している。
5.1.1. 子ども同士の関わりで、温かく、共鳴し、信頼関係が構築されている。
5.1.2. 全ての子どもが、開かれた保育者との関わりを通して、必要となる力を獲得している。
5.1.3. 全ての子どもが、安全、自信、一体感を感じることができるよう保育されている。
5.2.1. 子ども各自が、協同的学習、助け合い、学び合いができるようになっている。
5.2.2. 子ども各自が、自分の行動を意識し、他者の行動に適切に対処し、生じた問題を効率的適切に解決していく方法を見つけていける体制になっている。

※小野克志訳を筆者が改編

調査項目の作成にあたり、NQS 7 領域、58項目のうち、日本とオーストラリアの保育施設について学生が答えやすいと考えられる 5 領域中の 19項目を表 2 のように選び、学生がそれぞれの項目について、そう思う＝1 点、やや思う＝2 点、あまり思わない＝3 点、思わない＝4 点で評価してもらった。学生はオーストラリアの保育施設について10分間、日本の保育施設について10分間を用いて同様の項目でアンケートを実施した。また、それぞれの項目について、特に気付いたことを記述するように指示した。

(3) 分析結果

オーストラリアの保育施設について平均点の低い順（1 点は肯定が強く、4 点は否定が強い）に並べたのが図 1 である。さらに、日本の保育所について平均点の低い項目順に並べたのが図 2 である。前述のように、質問項目は日本の保育所についてもオーストラリアの保育施設について

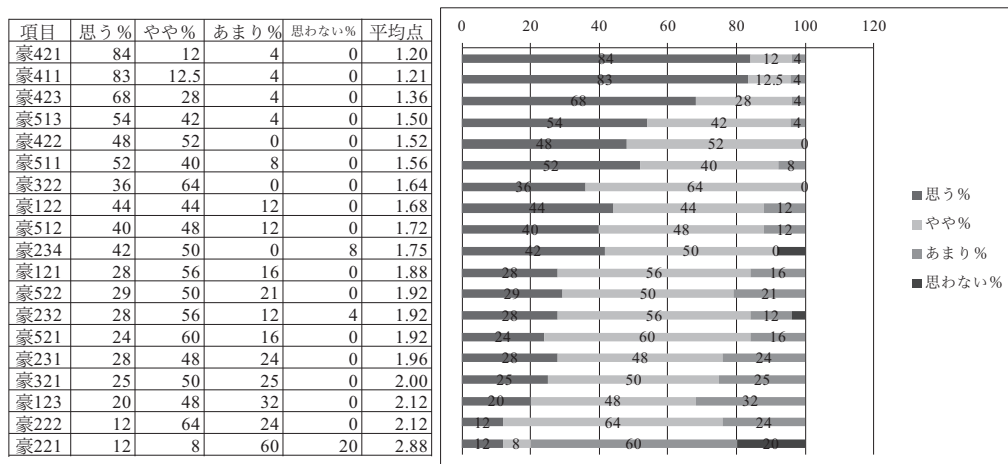


図 1 オーストラリアの保育施設の評価（高評価順）

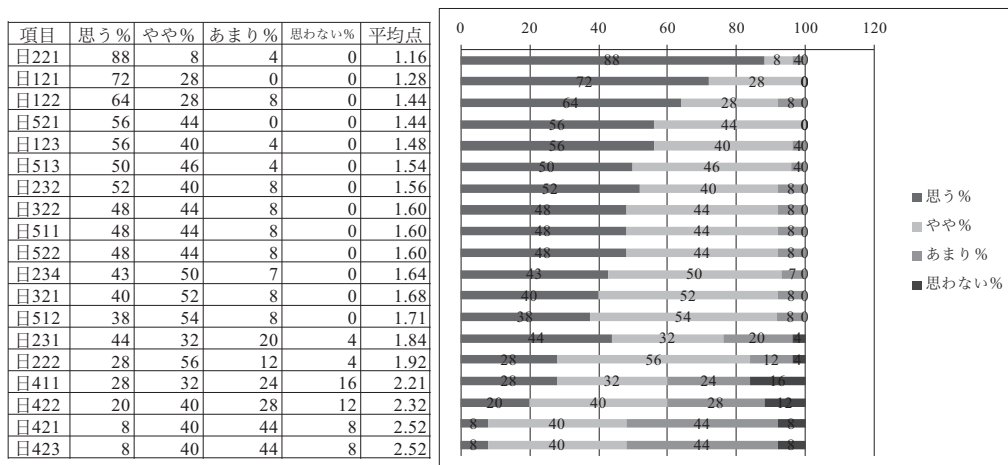


図 2 日本の保育所の評価（高評価順）

も同じのため、単純に平均点がどれだけの割合（百分率）になっているかを求め、オーストラリアの平均点の割合を小さい順に並べたのが図3である。図1～3で、項目の3桁の数字は、表2の質問項目の「.」印を省略したものである。

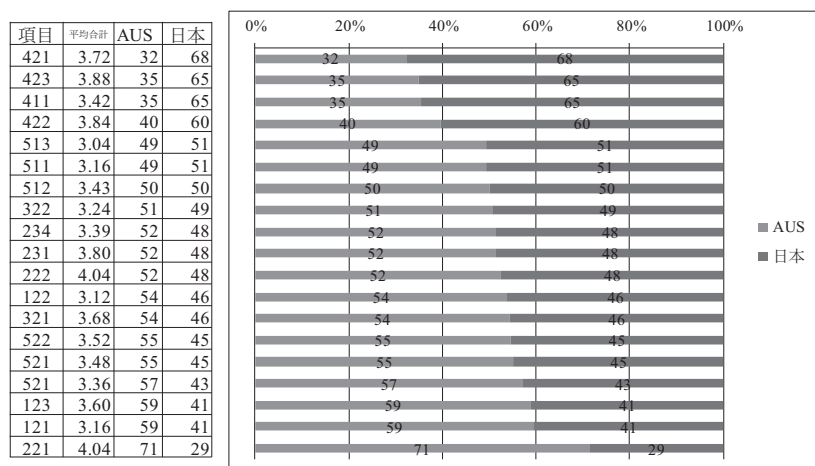


図3 オーストラリアと日本の保育施設の評価の比較

(4) 学生が考えるオーストラリアの保育観について

分析した結果から、学生がオーストラリアの保育で優れていると考える上位3項目は、次のとおりである。

学生がオーストラリアの保育で優れていると考える項目

- 4.2.1. 職業上の規範により、保育実践と触れ合い、人間関係が保たれている。
- 4.1.1. 常に適切な教員の配置と資格基準を満たしている。
- 4.2.3. 保育者同士が尊敬あい、公平性、他者の強みや能力を認め協働している。

一方、学生がオーストラリアの保育でよくないと考える上位3項目は、次のとおりである。

学生がオーストラリアの保育でよくないと考える項目

- 2.2.1. 健康的な食生活を促進し、適切な栄養面を重視した食べ物が提供されている。
- 2.2.2. 子どもが、身体的活動について計画的で自発的な経験をするように対応されている。
- 1.2.3. 保育者は、子どもの学習や発達にたえず研究的な視点をもち保育を展開している。

さらに、両国を比較してオーストラリアの方が日本よりも高い評価であり、優れていると考える項目は、次のとおりである。

オーストラリアの方が日本より優れていると考える項目

- 4.2.1. 職業上の規範により、保育実践と触れ合い、人間関係が保たれている。
- 4.2.3. 保育者同士が尊敬あい、公平性、他者の強みや能力を認め協働している。
- 4.1.1. 常に適切な教員の配置と資格基準を満たしている。

学生がオーストラリアの方が日本より優れていると考える項目について検討する。

4.2.1. と 4.2.3. の 2 項目については、学生がオーストラリアの方が優れていると考える項目であるが、オーストラリアの保育者が幼児や保育者同士、実習学生に対して尊敬の念をもって関わっていることがわかる。そして、そのことを学生はオーストラリアでの実習を通して強く感じたと思われる。また、4.1.1. は、適切な教員の配置と資格基準を満たしているかといった項目である。これは、オーストラリアの保育者 1 名が担当する子ども

の数が、概して少ないためと考えられる。たとえば 3 ～ 5 歳児では、日本の幼稚園の約 3 分の 1、保育所の約 2 分の 1 である。日本の幼児施設の保育者 1 名が担当する子どもの数は、学校教育を基本としているため諸外国と比べると多い。ただし、2 歳未満にのみ限定すれば、日本の方が多いとはいえない。日本の幼稚園は、1872（明治 5）年の学制では、幼稚小学と表記されており、そのまま小学校の 1 クラスあたりの子ども数を受け継いでいると考えられる。小学校の 1 クラスあたりの子どもの数が 40 名、幼稚園が 35 名など、少ない人数の保育者が多くの子ども達を抱えながら保育するのが日本の保育の特徴という印象をもっているためと考えられよう。

反対に、学生がオーストラリアの保育でよくないと考える項目について検討する。主な項目は 2.2.1.、2.2.2.、1.2.3. であり、食生活及び計画的、研究的な視点などについてであり、次に考察する日本の保育の優れている点につながっている。

(5) 学生が考える日本の保育観について

分析した結果から、日本の保育で優れていると考える上位 3 項目は、次のとおりである。

学生が日本の保育で優れていると考える項目

- 2.2.1. 健康的な食生活を促進し、適切な栄養面を重視した食べ物が提供されている。
- 1.2.1. 子どもの学習と発達、保育者の継続的な計画づくり、記録、評価に反映されている。
- 1.2.2. 保育者は、子どもの考えや遊び、計画的な指導を考慮した保育に応えている。

一方、日本の保育でよくないと考える上位 3 項目は、次のとおりである。

学生が日本の保育でよくないと考える項目

- 4.2.3. 保育者同士が尊敬しあい、公平性、他者の強みや能力を認め協働している。
- 4.2.1. 職業上の規範により、保育実践と触れ合い、人間関係が保たれている。
- 4.2.2. 保育に関わる者すべてが、協力し、挑戦し、助け合い、お互いの学びの重要性を理解し、技術、実践力を高めよりよい保育者集団を築こうとしている。

表 3 豪の保育者の配置基準（小野克志 2015）

子どもの年齢	保育者：子ども	定員（名）
0, 1 歳	1 : 4	8
2 歳	1 : 6	10
3 ～ 5 歳	1 : 12	24

表 4 年齢区分と保育者配置数（小野克志 2015）

クラス名	子どもの年齢	教員配置数
A Baby	6 週間から 15 カ月	2 名
B Toddler	1 歳 6 カ月～2 歳 6 カ月	2 名
C Junior Kindy	2 歳 6 カ月～3 歳 6 カ月	2 名
D Senior Kindy	3 歳 6 カ月～4 歳 5 カ月	2 名
E Pre-school	4 歳 6 カ月～5 歳	2 名

両国を比較して、日本の方がオーストラリアよりも高い評価であり、優れていると考える項目は、次のとおりである。

日本の方がオーストラリアより優れていると考える項目

- | |
|---|
| 2.2.1. 健康的な食生活を促進し、適切な栄養面を重視した食べ物が提供されている。
1.2.1. 子どもの学習と発達、保育者の継続的な計画づくり、記録、評価に反映されている。
1.2.3. 保育者は、子どもの学習や発達にたえず研究的な視点を持ち保育を展開している。 |
|---|

学生にとって日本の保育で優れていると考えている項目について検討したい。最も優れていると考える項目は、2.2.1.「健康な食生活」であり、さらにオーストラリアとの比較においても最も高い評価である。オーストラリアの食生活の場面について学生が記述したものを並べると表5のとおりである。

表5 オーストラリアの食生活についての記述より

- | |
|---|
| ①日本人の感覚からすれば、栄養面は偏っているが、現地の人はそれなりに気を使っている様だった。
②園で出される給食の味が濃かった。平気で食べ物を捨てる。
③モーニングティーやアフタヌーンティー等、おやつ的な部分が多く感じられた。
④親が用意したお弁当を食べるため、親によって配慮が足りない場合がある。
⑤嫌いな食べ物を、子ども達自ら捨てていたから。
⑥私の園は給食があったから、バランスはよい方だと思う。
⑦朝食や昼食に適している食べ物について言及するものの、結局は各家庭の問題なので園が促進しているとはいえない。
⑧私が行った園は弁当でしたが、毎日同じような物しか持ってこない子どもがいました。
⑨保護者が用意したものをそれぞれ食べていたので、子どもによると思われる。
⑩基本的に簡単なサンドイッチだった。
⑪食べたいという気持ちを大切にしていると思う。
⑫計画はされているが、全体的にカロリーが高そう。 |
|---|

オーストラリアの幼稚園や保育施設では、給食を実施しているところもあるが、弁当のところもある。弁当は、その内容は家庭によりまちまちで、栄養を考慮せず、毎日同じ弁当を持参する子どももいるようである。それに反して、日本の保育所は給食が完全実施されており、その栄養のバランスもよいことが日本の保育の最も優れている点として「健康な食生活」を挙げていると推測される。

次に日本で優れている点は、1.2.1.「保育者の継続的な計画づくり」である。この項目については、ある学生が「日本の保育は、保育計画、年間指導計画、月案に基づき、週案、日案を子どもの発達に合わせて、担任が計画している」と記述しているように、綿密な計画に基づき、着実に保育が実施されていると考えているためと推測される。オーストラリアにおいても、日案や週案などのような計画は教室の壁面に貼り付けて保護者が見ることができるようになっているが、日本の指導計画よりは簡易に感じているようである。

また次に高い評価を得ているのは、1.2.3.「研究的な視点」である。この項目については、学生は「子どもの姿を見て計画を考えていたため」、「教育的な視点で保育を行っている」、「子ども

一人ひとりに目を配り、学習に対応している」と記述している。学生は日本の保育を保育研究的であると捉えていることが推測される。

3. まとめと今後の課題

オーストラリアの保育評価基準 NQS の基準項目（表 1）によると、学生は保育者同士の人間関係や、保育者同士を尊敬すること。そして、適切な教員配置などに関する項目を含めた④「保育者の配置基準」についてはオーストラリアの保育の方が優れていると考えている。その一方、健康な食生活や栄養面への配慮、そして保育を計画的、研究的な視点で実施したりするなどの①「教育と実践」と②「子どもの健康と安全」などについては日本の保育の方が優れていると判断していることがわかった。

④「保育者の配置基準」の保育者集団の理解については、人間理解の深さが関係してくると思われる。学生がオーストラリアの保育者と関わったのは、短期大学の時に実習に参加していれば 2 週間、そして今回の長期留学での 9 ヶ月間である。一方、日本の保育との関わりは、学生自身が保育所や幼稚園で保育された期間並びに、短期大学から専攻科の 4 年間と考えると、10 年弱と考えることができる。このように両国における保育の関わりの時間の長短には大きな差異があり、かつ、保育観を理解するためにはその国の文化やアイデンティティの理解も必要となるため、この結果は慎重に受け止めるべきであろう。学生が何に基づいてその保育観を理解しているかについて、今後さらに検討していく必要がある。

学生が 9 ヶ月間の滞在で取得を目指したオーストラリアの保育資格は、Certificate III（吉見昌弘他 2016）として、保育のアシスタントとして働くことが出来る資格である。さらに担任として働くことができる資格 Diploma of Children's Services、園長として働くことが出来る資格 Advanced Diploma of Children's Services がある。Pre-school を併設する保育施設もあるが、この担任は別の教員資格を必要とする。この資格制度を見る限り、オーストラリアの保育資格は専門性の高さに合わせて、きちんとランク付けされている。日本では、保育所については保育士資格 1 つのみである。日本の幼稚園教諭免許状は 3 種類あるが、2 種免許状で園長をされる方もいるなど、資格のランクと地位が十分に連動していない面もある。言い換えれば、日本の保育者集団は保育経験の年数や先輩、後輩の関係などインフォーマルな関係を重んじる一方、オーストラリアの保育者集団は、資格のランクに基づく階級（役割分担）が明確で分かりやすい。このことやオーストラリアが取り入れているマルチカルチャリズム（多文化主義）などの影響によるオーストラリアの保育者のおおらかさが、保育施設内での人間関係として表れ、それを今回学生が感じたのかもしれない。

ほとんどの学生が、オーストラリアの保育、保育者、保育施設を肯定的にとらえており、帰国後の進路はインターナショナルプリスクールの教員、公務員、私立保育所、幼稚園などの他、卒業後に再びオーストラリアへ渡航し、Diploma 資格に挑戦、Certificate III の資格を活かしオーストラリアで働くという進路など社会人として国際的かつ多様な広がりをもっている。今後、こうした学生達が卒業後にオーストラリアで渡航した経験を生かして働くことができるようオースト

ラリアと日本の保育観について、さらに研究を積み重ねていくことが保育者養成としての今後の課題である。

引用文献

- 小野克志（2015）「オーストラリアの保育制度と海外保育実習プログラム—クィーンズランド州のチャイルドケアセンターを事例として—」『名古屋文化学園保育専門学校紀要』創刊号、pp. 43–47
- 小野克志・横井一之（2016）「オーストラリアにおける保育評価に関する研究」日本保育学会第69回大会、p. 1243
- 吉見昌弘・内田政一・加藤あや美・小林舞（2016）「オーストラリアの留学と Early Years Learning Framework (EYLF) 翻訳」三恵社

（受理日 2017年1月10日）